

箏曲京極流の調査報告

和田 一 久*

Report on the Kyogokuryu Koto-School

Katsuhisa WADA

As the preparatory research for the acoustic investigation, outline of the Kyogokuryu Koto-school, authorized as the prefectural intangible cultural asset of Fukui and also as the selected national intangible cultural asset, is reported. Musical features, historical tree and the list of compositions are described respectively.

1. まえがき

箏曲京極流は、生田流から出た ^{すずきこそう}鈴木鼓村(1875-1931)が明治34年京都で創設した新古典主義箏曲の一流派で、のちの宮城道雄らによる「新日本音楽」の運動の先駆けとなったものである。雅楽の箏の演奏形態を基本にし、古流の手法を保存しながら、同時代の清新な抒情詩を歌詞に選んだロマンチックなその歌曲は、明治後半から大正前半にかけて、京都・東京の文人たちの間で大いにもてはやされた。しかし、鈴木鼓村以外に優れた作曲家が永らく出なかったし、器楽化の方向に進んでいった箏曲の主流とはその主張が逆行するものであったので、だんだんに衰退に向かい、二代宗家を継承した ^{あまたこうへい}雨田光平(1893-1985)の努力によって、昭和39年、福井県の無形文化財に、昭和48年、国の選択無形文化財(記録をとる)に指定されたが、今日その楽曲を正しく演奏し得る者は、福井県内にわずか3名を残すに過ぎない。

箏曲京極流については、既に杉原丈夫による調査報告があるが、その後多くの資料が発見され、相当数の補訂の必要を認めたので、ここに改めてその内容の概要を報告する。

2. 箏曲京極流の特徴

2.1. 新古典主義

明治34年5月、京都で鈴木鼓村によって創始された京極流箏曲は、「古き革袋に新しき浪漫の酒を盛る」を理想とする新古典主義の箏曲である。即ち、雅楽の箏や筑紫箏・^{つくしごと}八橋流などの古流の箏の組歌以来の簡潔な手法を継承して、侘びと渋味を追求しつつ、内容的には抒情的表現に力を入れ、^{すすきだきゅうきん}薄田泣菫や^{かんばらありあけ}蒲原有明、^{たかやすげこ}高安月郊らの清新な新体詩を歌詞に選んで作曲した。雨田光平の作風は鼓村のそれとはかなり異なるけれども、この精神は正しく受け継がれている。

* 経営工学科

2.2. 独奏を主体とする

箏の独奏曲として作曲された曲が多く、斉唱されることも稀である。また、尺八や三絃とはほとんど合奏されない。但し、数は少いが合奏曲もある。現在では楽譜は遺っていないけれども、「橘媛」（高安月郊作詩）にはもと箏の二部合奏（歌は斉唱）に篠笛が入り、「おもひで」（薄田泣菫作詩）には胡弓の手が付けられていた。鈴木鼓村も雨田光平とともに、合奏曲は初めから楽器の編成を詳しく指定して作曲しており、完成された箏の曲にあとから尺八の手を加えるといったことは、自らはしなかった。但し、「裾野」（高安月郊作詩）には、鼓村の時代に明暗流の鈴木孝道（後の明暗三十五世・樋口対山）によって尺八部分が付けられ、両者で何度か舞台合奏をしているし、また、雨田光平の時代になって、琴古流尺八の鈴木如空によって、「野路の曲」（蒲原有明作詩）、「領巾振山」（薄田泣菫作詩）及び「紅梅」（薄田泣菫作詩。（図2、3参照））に尺八譜が付けられ、楽譜が残っている。

2.3. 雅楽の演奏形態に準ずる

演奏にあたっては男子も女子も平安朝風の装束を着ける。男子はけつてき 闕腋の袍ほう〔両脇を縫わずにあけてある上衣で、平安朝末期には行幸や節會せちえの時に四位以下の武官ぶくわんがこれを束帶そくたいの表衣うわぎに着用した〕にしやかん 紗冠が京極流の正装である。しかし、今日遺っている写真（図1）などで見るかぎり、男子も女子も、むしろ奈良朝時代の朝服ちょうふく（宮廷式服）に近いように見える。これには理由がある。平安時代後期の華麗な闕腋の袍の一式（小袖したのさね・下襲ひとえ・單など18種ものセット）を全部着用すると、移動や演奏に不便であるので、小袖・表袴うえのはかまに闕腋の袍・それに冠と沓くつといった程度に略したからである。正式の武官（陸軍歩兵中尉）であった鼓村はともあれ、晩年の雨田光平がそうしたように、今日では、略式のものを用いて演奏することが多い。女子の場合も、現在では普通の着物姿で演奏している。

男子は樂座がくざ（安座あんざに似ているが両脚を交差させず、浅く足先を揃えて両膝が床に着くようにする）し、女子は正座する。従って、男子は箏に対して正面に向き、女子は生田流と同じく箏に対して右膝がやや近くなるように座る。いずれの場合も、右肩の線が龍角りゅうかくの線に合うように座る。背筋をまっすぐに伸ばして、しかもゆったりと、柳が風になびくように自然に座り、顔は上向き過ぎず、うつ向き過ぎず、とするところは他流と同じである。

箏は生田流の普通の箏を（最近では山田流の箏も）用いるが、一絃一絃の余韻を重んずる京極流のゆったりとした弾じ方に適うように、19番（匏）より太い箏系をかなり緩く締める。柱を立てて、両側の開放音が成人男子の場合双調そうちょう（g）から黄鐘おうしき（a）の間が良いようである。張力が高すぎると絹糸は極めて切断されやすく、またあまり低くなると第四絃の「掩」や「押」の手法が不安定となり、また演奏の姿も崩れてしまう。

箏系は絹糸製を用いる。テトロン・ナイロン製と比較して響きが優れているからである。同じ理由から、箏爪も京流（生田流）の箏爪を工夫した、切口がカマボコ型の厚い箏爪を用いる。

2.4. 時代趣味を大切にする

単に音楽の演奏だけでなく舞台上の演出を大切にする。演奏に際して平安朝の装束を着けることのほか、例えば「静」には擬白拍子男舞^{ぎしらびょうしおとこまい}を配したり、「玄界楽」や「擣衣」などの舞曲には正規の雅楽の舞を付けたりなど、絵画としての美しさも加えた時代趣味を重んじる。即ち、京極流に志す者は、単に箏を弾くだけでなく、絵画や書、文学にも興味を向けなければならない。できれば、鈴木鼓村や雨田光平がそうであったように、その実作者であることが望ましい。

2.5. 朗詠の聲調を基本とする

江戸時代に爛熟した三味線音楽の情緒纏綿たる歌いかたは厳しく廃除され、歌は明確な発音で音吐朗々と唱われる。その聲調の基本は雅楽の朗詠^{さいばら}・催馬楽^{へいきやく}に採られ、細部には平曲^{へいきやく}（平家琵琶^{へいけいび}）の聲^{こゑ}節^{せつ}が斟酌されている。

2.6. 古手法を遵守・保存する

箏の組歌以来の「右手十八法」、「左手八法」、それに鈴木鼓村自ら平曲など古楽の唱法を研究して制定したという「聲^{こゑ}節^{せつ}十二法」が正しく守られている。

例えば古い生田流の古曲の演奏の場合、「合わせ爪」は中指よりも親指を幾分遅らせて弾くのが伝統的な奏法であるが、京極流では、遅れたことがはっきりと判るように、トテンという響きで奏される。このことが京極流における重奏・斉奏を困難にしているともいえる。

また、京極流の奏法には筑紫箏の古法が保存されている。『松響閣箏話』^{しょうきやうかくそうわ}（今泉千春述・今泉千秋校・天保年間、1830～1844年）のなかに、

「押し手の形象は蜻蜓^{せいてい}（とんぼ）の水に點ずるが如し、連は玉を盤に走らするが如し」

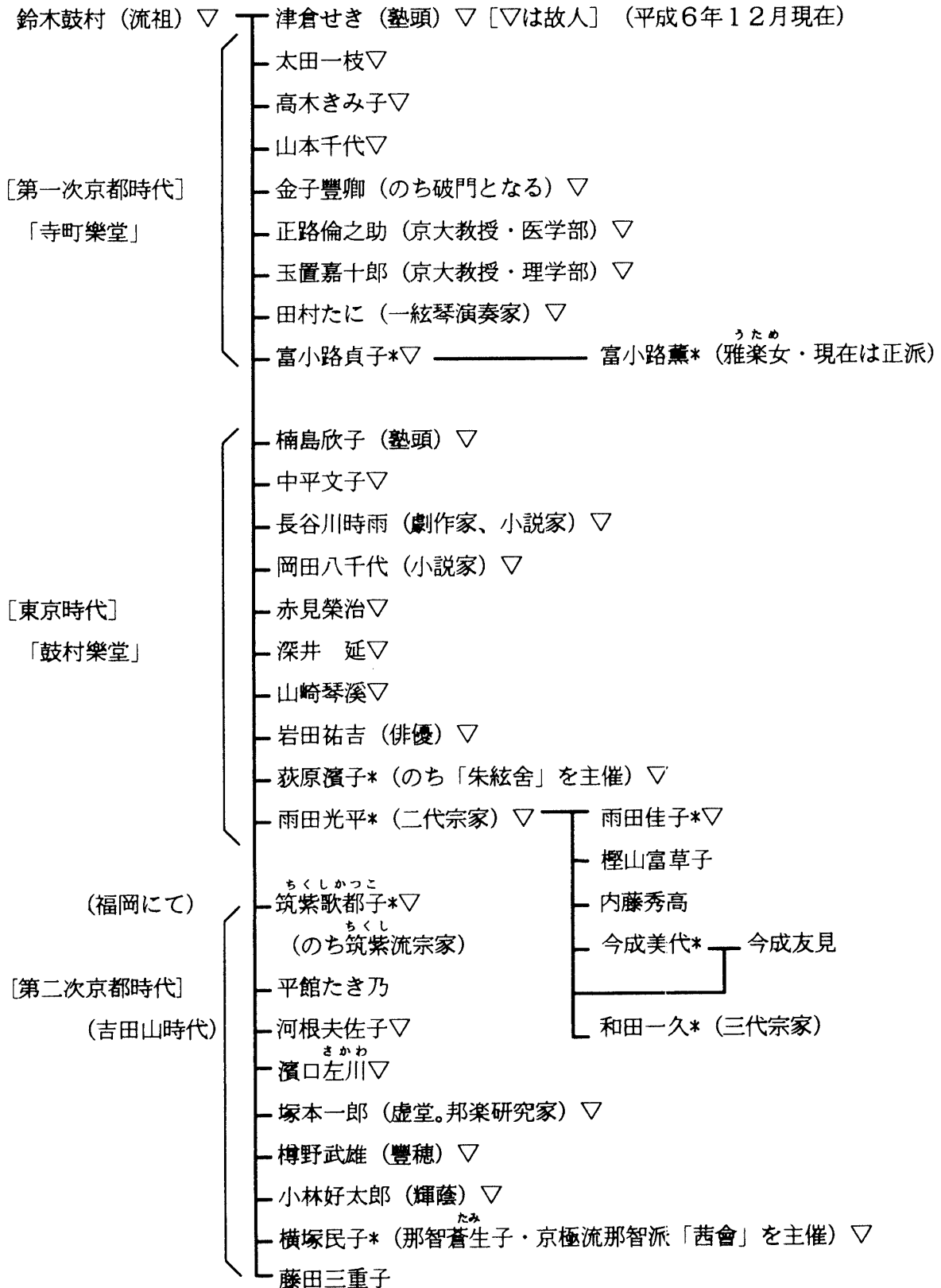
とあるが、京極流の歌曲を演奏する際の、「押し手」即ち「掩^{えん}（押し止める色）」における、トゥーウンの（あらかじめ左手で軽く押してから右手で弾じ、弾ずると同時に解放音に戻す。そして更に通常のあと押しを施す）の響きや、現存他流にはない独特の「裏連^{うられん}」の趣は、この「蜻蜓點水」や「盤上走玉」の印象にそっくりあてはまっており、筑紫箏から鼓村が採り入れたものとしてよい。また、「橋媛」には、筑紫箏口傳とされる「風連^{ふうれん}」（「引捨^{ひきすて}」に似ているが、龍角^{りゅうかく}から5、6寸のところより始め、風の音を擬して初め大きく終り静かに弾く）及び「雁鳴^{かりんめい}」（箏柱を越えて押す、「順の単の運び」で為斗十の斗を親指で消す）の二法が用いられている。

2.7. 絶対音高により調絃する

他流とは異なって京極流では（少くとも鼓村作曲では）、調絃法によって絶対音高が定められている。例えば「樂調子^{がくじょうし}」では第一絃を必ず平調^{ひやうじやう}（ホ＝e）にとり、調絃名も「樂調子」といわなくて「平調」とのみ記したり、「黄鐘調」では第二絃を必ず黄鐘（イ＝a）にとる（つまり第一絃は平調（ホ＝e））、などであるが、これは、ひとつには雅楽の箏の伝統を鼓村が襲踏したこと、ふたつには京極流の歌曲の殆んどが鼓村ひとりの作曲になることにその原因がある。

3.2. 鼓村以降の伝承者たち

以下は京極流三代目までの伝承者のリストである。* 印は箏曲演奏家として教授した人たちである。記録に残っている特に縁の深い人物のみを掲げ、単に免状を持つだけの者は省いた。



3.3. 創始者・鈴木鼓村の略歴

鈴木鼓村は本名を鈴木映雄^{てるを}、幼名を卯作^{うさく}といい、明治8年（1875）9月9日、宮城県亶理郡亶理町（旧小鼓村）に生まれた。東京の陸軍歩兵教導團在学中に落合直文、小中村清矩に国文学を、御雇い外国人、ディットリヒにバイオリンを、生田流の高野茂に九州系の箏曲を学んだが、明治27年、日清戦争勃発とともに従軍し、山東半島、台湾に転戦、武勲によって陸軍中尉に昇進し、除隊した。のち、陸軍省の歴史編纂課の専門部員となり、この間に自由に国文学と日本音楽の研究に励み、その努力はのちに『日本音楽の話』〔晝報社・1913年8月〕に結実した。

明治31年、福井県立福井尋常中學校に赴任、歴史、国文、兵式を教えた。ここで美しい芸妓胡蝶に恋したが、「あなたが日本一の箏曲家になられたら。」とはずされたことから発憤し、京都に出て箏曲改革に着手、明治34年5月、高安月郊の詩「静」に作曲し、新箏曲「國風音樂會」を標榜した。この時期、明治33年から数年間、波多野流平曲の最後の檢校・藤村性禪^{ふじむらせいぜん}について、平家琵琶を学び、また、明治35、36年、筑紫箏最後の宗家・野田聴松^{のだちょうしょう}に入門している。

明治40年、東京に進出して「京極流」と改称、新詩社の詩人たちや龍土會の文人たちと交わり、戯曲、隨筆に手を染め、更に長谷川時雨と協力して日本最初の和製オペラ「空華^{くうけ}」を作曲するなど、幅広く活躍したが、経済的な破綻から大正7年京都に戻り、名を那智俊宣と改名、大和絵画家として再出発し、比較的穏やかな晩年を送った。昭和6年3月12日、慢性心筋炎と腎臓結石のため死去、吉田山の神樂岡神葬墓地に葬られた。

著作には、日本音楽関係では前掲書の他に『箏曲譜・全24巻』〔東京社・1913年より〕、隨筆に『耳の趣味』〔佐久良書房・1913年6月〕があり、また、詩歌作品は戦後、雨田光平により、『鈴木鼓村遺著・としのぶ集』〔光平楽堂・1965年7月〕として纏められている。

3.4. 二代宗家・雨田光平の略歴

二代目を継いだ雨田光平は本名を外次郎^{ほかじろう}といい、明治26年2月、福井市相生町（現在の毛矢町）に生まれた。明治44年福井中學校を卒業後、翌年東京美術學校彫塑科に入学、同年鈴木鼓村に入門した。大正5年美術學校を卒業、翌6年、宮城道雄を知り、その親交は生涯続いた。

大正9年、ハープ修業を志して渡米、同14年渡仏、パリのマルセル・ツールニエについて本格的にハープを研究し、同時に彫刻の修業にも励んだ。

昭和4年9月帰国、構造社に属して盛んに美術制作・批評活動を開始した。昭和6年、鈴木鼓村の死去により京極流二代宗家を継承、昭和10年には「日本アルプ（ハープ）協會會」を設立、主として東京で箏曲とハープの演奏活動を続けた。

戦災で焼け出されて福井に戻り、二十年代後半に足羽山の下に「光平楽堂」を営んで、彫刻やハープ、京極流箏曲の創作活動と後進の育成に努めた。そして昭和30年には、欧州旅行の途次たち寄ったロンドンからアイリッシュ・ハープを持ち帰り、その構造の改良と楽曲の普及に努めた。こうして福井県の芸術・文化活動の指導者として、幾多の俊才を育て、福井市の名誉市民第一号に指名されたが、昭和60年11月14日に心不全のため福井市で没した。墓は足羽山の下、天女山孝顕寺にある。

4. 京極流作曲リスト

4.1. 鼓村生前の諸家の作曲（明治26年から昭和6年まで）

鼓村は生涯に90曲を作曲したと自称していたが、生涯に30回以上にもわたる鼓村の転居や、雨田光平に譲られた多くの楽譜類が戦災や福井大震災で散逸したせいで、その半数以下しか記録がなく、従来疑問視されていた。その後、古い楽譜の収集、『京都日出新聞』などの調査により、今日ではほぼその70%が判明している。

曲名	作 詩	作 曲	調弦法	作曲・発表年代	分類その他
千 手	下田歌子	鈴木鼓村	平調子	明治26年7月	史 高野茂作で発表
静	高安月郊	鈴木鼓村	雲井調子	明治34年5月	史 京極流旗揚げ曲
嚴島詣	高安月郊	鈴木鼓村	若葉調	明治35年5月	史
宮城野	不詳	鈴木鼓村	不詳	明治35年5月	雑 逸①
裾 野	高安月郊	鈴木鼓村	平調子	明治35年10月	史 「西行」とも
橘 媛	高安月郊	鈴木鼓村	雲井調子	明治36年2月	史 箏二部と篠笛
春の行衛 ^{ゆくえ}	高安月郊	鈴木鼓村	不詳	明治36年3月	雑 逸①
大原女	薄田泣菫	鈴木鼓村	樂調子	明治36年5月	小
花賣女	薄田泣菫	鈴木鼓村	平調子	明治36年6月	小 西山徳茂都原曲 ^{とくのいち}
笠置落	薄田泣菫	鈴木鼓村	雲井調子	明治36年7月	史 昭和5年改訂
雲井六段調	——	鈴木鼓村	雲井調子	明治36年7月	調 替手
應天門	高安月郊	鈴木鼓村	不詳	明治36年頃	小 逸②
月（千種）	小學校唱歌	鈴木鼓村	中空調子	明治36年頃	小 西山徳茂都原曲
海 女	薄田泣菫	鈴木鼓村	樂調子	明治36年9月	小
秋の夜	與謝野寛	鈴木鼓村	雲井一乙	明治36年9月	雑 昭和2年改訂
おもかげ	薄田泣菫	鈴木鼓村	不詳	明治36年10月	小 逸②
紅 梅	薄田泣菫	鈴木鼓村	黄鐘調	明治37年2月	小 笙と合奏
菖 蒲	鈴木鼓村	鈴木鼓村	不詳	明治37年5月	小 逸①
阿 新	不詳	鈴木鼓村	樂調子	明治37年5月	史 逸①
七 夕	高安月郊	鈴木鼓村	水調	明治37年8月	小 逸③
上 巳	不詳	鈴木鼓村	不詳	明治37年10月	小 逸①
雛 祭	高安月郊	鈴木鼓村	不詳	明治38年4月	小 逸②
待ちどころ	薄田泣菫	鈴木鼓村	歸雁調	明治38年5月	小
玄界樂	吉井朽琴	鈴木鼓村	樂調子	明治38年6月	舞 翌年11月定稿
古き都	今様より	鈴木鼓村	不詳	明治38年頃	史 逸②
なつめ	薄田泣菫	鈴木鼓村	不詳	明治39年頃	童 逸②
雁と燕	薄田泣菫	鈴木鼓村	平調子	明治39年1月	童 最初の童曲

おもひで	薄田泣菫	鈴木鼓村	歸雁調	明治39年5月	小 胡弓と合奏
有 子	吉井朽琴	鈴木鼓村	中空調子	明治39年11月	史 昭和初年に改訂
露	薄田泣菫	鈴木鼓村	不詳	明治39年12月	雑 大正6年に別曲

(以上、第一次京都「寺町樂堂」時代の作曲)

野路の曲	蒲原有明	鈴木鼓村	片岩戸調	明治41年2月	雑
葛の葉	與謝野晶子	鈴木鼓村	平調子	明治41年頃	小 昭和年間に別曲
領巾振山 ふぎょう	薄田泣菫	鈴木鼓村	歸雁調	明治42年6月	史
俯 仰	小林愛雄	鈴木鼓村	不詳	明治42年頃	雑 逸①
ありあけ	狂言歌謡	鈴木鼓村	平調子	明治44年3月	小 逸③
あかしや くうげ	北原白秋	赤見榮治	平調子	明治44年夏	小
空 華	長谷川時雨	鈴木鼓村	不詳	大正2年5月	劇 逸②
秋の雨	相馬御風	鈴木鼓村	不詳	大正2年頃	雑 逸①
夜の曲	狂言歌謡	鈴木鼓村	平調子	大正2年9月頃	雑 「六段戀慕」より
櫻 井 ちようや	鈴木鼓村	鈴木鼓村	雲井調子	大正2年以前	史 高野茂原曲を補曲
長夜の調	——	鈴木鼓村	平調子	大正2年以前	調 手事練習曲
練習曲	——	鈴木鼓村	平調子	大正2年以前	雑 手ほどき練習曲

(以上、東京「鼓村樂堂」時代の作曲)

別れ路	鈴木鼓村	鈴木鼓村	不詳	大正6年秋頃	小 逸②
狐の嫁入	薄田泣菫	鈴木鼓村	樂調子	大正6年末頃	童 「狸の失戀」とも
山 路	鈴木鼓村	鈴木鼓村	樂調子	大正6年末頃	童 「しぐれ」とも
露	薄田泣菫	鈴木鼓村	樂調子	大正7年初め頃	童
子守唄	わらべ唄	鈴木鼓村	不詳	大正7年初め頃	童 逸②
兎	鈴木鼓村	鈴木鼓村	歸雁調	大正7年初め頃	童 「比叡の山から」
足羽音頭	鈴木鼓村	鈴木鼓村	樂調子	大正7年初め頃	雑
福井音頭	鈴木鼓村	鈴木鼓村	樂調子	大正7年初め頃	雑
ゆく春	薄田泣菫	鈴木鼓村	樂調子	大正7年初め頃	童 「るりがなきそろ」
加茂川	猪熊夏樹	鈴木鼓村	歸雁調	大正10年3月	雑
相生の調	鈴木鼓村	鈴木鼓村	歸雁調	大正10年11月	雑
浮 舟	山上忠麿	鈴木鼓村	水調	大正15年頃	小 昭和5年定稿
黒 船	三味線組歌	濱口左川	平調子	昭昭3年	小 逸③
秋 草	佐藤春夫	樽野武雄	平調子	昭和3年	小 逸③
同心草	佐藤春夫	樽野武雄	雲井調子	昭和3年	小 逸③
夢の世	松崎國雄	樽野武雄	平調子	昭和3年6月	小 逸③
あきさめ こんかじょう	鈴木鼓村	鈴木鼓村	雲井調子	昭和3年10月	小 逸③
狐嫁調	薄田泣菫	小林輝蔭	平調子	昭和4年頃	童

子守唄	不詳	樽野武雄	雲井調子	昭和3～5年	雑 逸③
別れ路	不詳	小林輝蔭	平調子	昭和3～5年	小 逸③
擣衣	穂積孝女	鈴木鼓村	水調	昭和4年9月	舞 雅樂舞は現存せず
夢の華	柳原白蓮	鈴木鼓村	平調子	昭和4年9月	雑 逸②
葛の葉	與謝野晶子	鈴木鼓村	平調子	昭和5年7月	小 明治42年作と別
夜の曲	狂言歌謡	鈴木鼓村	平調子	昭和5年10月	雑 「慶長小唄」とも
冬の夜寒	小学校唱歌	鈴木鼓村	平調子	昭和5年頃	雑 逸③
大原山	鈴木鼓村	鈴木鼓村	雲井調子	昭和5年11月	史 遺曲

(以上、第二次京都「吉田山樂堂」時代の作曲)

賀茂川の曲	池邊藤園	鈴木鼓村	不詳	不詳	舞 雨田光平補曲、逸①
-------	------	------	----	----	-------------

4.2. 二代宗家・雨田光平時代の諸家の作曲 (昭和7年から昭和60年まで)

曲名	作 詩	作 曲	調弦法	作曲・発表年代	分類その他
雉子と兎	薄田泣菫	雨田光平	平調子	昭和11年頃	童 鼓村原曲による
別れ路	鈴木鼓村	雨田光平	雲井調子	昭和十年代	小 逸②
初夏草心抄	雨田光平	雨田光平	平調子	昭和23年7月初	雑 のちハープに作曲
夕の曲	———	雨田光弘	平調子	昭和二十年代	調
こもり居	中野鈴子	雨田光平	雲井調子	昭和30年10月	小 逸③
新春譜	雨田光平	雨田光平	樂調子	昭和31年1月	雑 ハープ・箏合奏曲
擬和讃	源平盛衰記	雨田光平	若葉調	昭和32年12月	雑 鼓村原曲による
私の日記	雨田光平	雨田光平	不詳	昭和33年12月	雑 ハープ・箏・尺八 箏の譜は逸②
讃 歌	辻森秀英	雨田光平	樂調子	昭和34年5月	舞 箏・雅楽器合奏
我死なば	岡倉天心	雨田光平	歸雁調	昭和37年秋	雑
練習曲	———	雨田光平	平調子	不詳	調

※ 史 史曲：歴史・神話に取材する。

舞：舞曲。雅樂に準じ、舞を伴う。

小 小品：短い抒情曲。

調：調物。段物。及び歌詞のない器楽曲。

雑 雑曲：やや長い抒情曲。

劇：樂劇曲。和楽器によるオペラ。

童 童曲：箏で弾く童謡。

※ 逸① 曲名だけしか判明していないもの。

逸② 歌詞が残っているもの。

逸③ 歌譜が残っているが、未だ復元されていないもの。

5. 楽譜

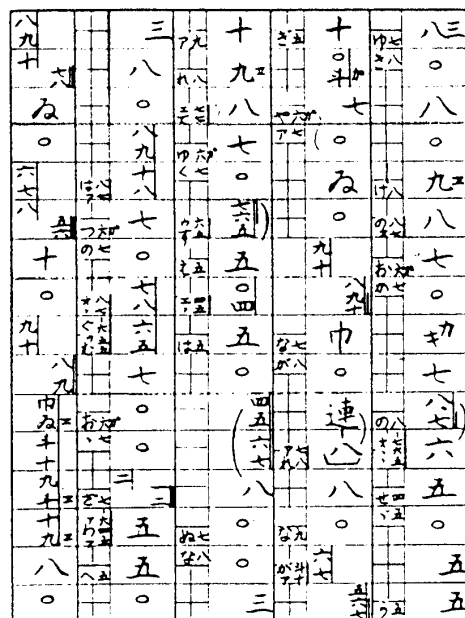
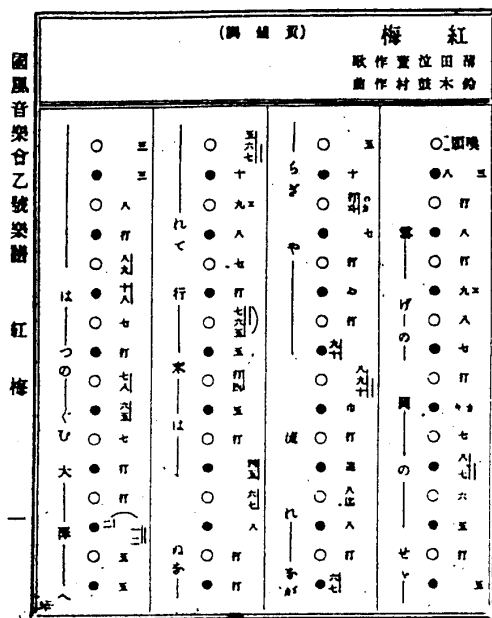
鈴木鼓村は京極流を創始した最初から楽譜による教授を行っていた。初期のものは、(図2)に示すように、『箏曲大意抄』(山田松黒著・1779年)を基本に、西洋音楽の音符の概念を導入したもので、箏の手は三行分ち書き、歌詞には高さが記入されていなかった。その後、一拍の表裏の区別を付け、歌詞の高さも記入され、明治末年には現在の形(図3)に改良されている。



(図1) 上: ^{けってき} ^{ほう} 闊腋の袍を着た鈴木鼓村
明治40年春。左はアメリカ・ビクター社の録音技師、ガイズバーグ、右は通訳。

(図2) 下左: 初期の京極流楽譜
明治39年発行。当時鼓村の社中は「國風音楽會」と称していた。

(図3) 下右: 現行の楽譜
(図2)と同じ部分を示す。



参考文献

- 杉原丈夫「箏曲京極流」[『文化財調査報告・第16集』福井県教育委員会・1966年3月]
 岸辺成雄・平野健次「筑紫箏調査報告」[『東洋音楽研究・第26～29合併号』音楽之友社・1971年7月]
 和田一久『京極流歌譜—ひとつの鈴木鼓村傳—』[上北野楽堂・1990年6月]

(平成6年12月17日受理)